

この世界での最初の記憶は、森の中。

現実世界——現代日本で眠りについたはずの私は、パジャマ姿のまま鬱蒼とした夜の森に放り出されていたのだ。

魔物が私を見つけて襲ってくる。私の肩を魔物の爪が切り裂く。血しぶきが飛んで、燃えるような熱さが肩に走った。

絶望に震える私の目の前で、返り血を浴びた魔物は急に悶え苦しみはじめ——やがて、ひっくり返って息絶えた。

私の血は、この世界の生き物にとって毒になるらしい。

お前は異物だと、世界の方から言われている気がした。

血だけでなく汗も涙も尿もそれ以外も、すべての体液がダメだった。人と触れ合うだけでも汗が移って相手を苦しめる。

友だちなんてできるはずない。恋愛なんてもってのほか。

知らない世界でいきなり孤独を味わった私だったが、一つだけできることがあった。――魔物退治だ。

弱い魔物なら、事前に採取しておいた血をかけるだけで一撃。

強い魔物には血だけでは太刀打ちできないけれど、幸い私は若い女だ。慰み者にしようとする雄オスの魔族は少なくない。

体を差し出して少し我慢していれば、勝手に相手が死んでいく。

これくらいしか、私にできることはない。

生きているだけで誰かを危険に晒してしまう私が、世の中の役に立つ唯一の方
法だった。

そして、ある夜。

燃え盛る炎と、空から降り注ぐ雷。

見るからに危険な、おどろおどろしい山の頂にある古びた魔族の居城。

そこに迷い込む少女が一人……まあ、私のことなんだけど。

戦うための武器もなく、身を守るための装備もない。それでも私は臆さずに、城の門扉をノックした。

「あのう、ごめんくださいーい。道に迷ってしまって……助けてくださいませんかー？」

そう声を上げると、しばらく経って城の中から人が出てきた。

いや、人ではなく人型の魔族だ。耳は尖り、頭には真っ黒のツノが2本、左右対称に天を指している。

背は私より頭二つ分は高く、筋肉質な体をした男だった。

「ふむ、こんな山奥に迷子ですか」

男は眉をひそめて、不審がるようにつぶやいた。当然だ。魔物だらけで地面が燃えていて雷の降る山なんて、どう考えたって人間の女が迷い込むようなところではない。

しかし私は大げさに演技して、どうにか彼の懐に入ろうと試みた。

「歩き疲れて、もう……限界で……。一晩泊めてくださるだけでいいのです、どうか……っ！」

くすん、と鼻を鳴らす私を見て、男は目を細めて笑った。本心の読めない、貼りつけたような笑顔だ。

「それは大変。休んでいきなさい」

「あ……ありがとうございます！」

感激してパッと顔を輝かせる演技も忘れない。私は男に手招かれるまま、古城の中に足を踏み入れた。

きつと男は本気で私をもてなそうなんて思っていないだろう。

私も当然、そんなことは期待していない。

ことの発端は、数日前に遡る。

私は冒険者として、城下町のギルドに届けられる魔物討伐の依頼をこなして日々暮らしている。

そんな私の腕を買ってくれた町の商人から、秘密裏に相談を持ちかけられた。『家宝の指輪を魔族に奪われて困っている。先祖代々の祝福が籠められた、この世に一つしかない貴重な品なのだ』と泣きついてきた商人に、私は断りきれずつい頷いてしまった。

かくして私は一人、こうして魔族の居城にやってくるようになったのだった。

建物の中に入ると、薬品の匂いがツンと鼻を刺した。薬草を燻いぶしたときに出る独特の匂いだ。

この魔族の男は薬師で、薬を作るために祝福付きの指輪を奪った……ということころだろうか。

鼻をすんすんと鳴らす私の様子に気づいた男は、上機嫌な声音になった。

「もしかしてわかりますか？ 薬の匂い。薬品には目がなくてね。この山奥に隠れ住み、いろいろと研究しているのです。ああ、申し遅れました、私はユリウスと申します」

「ユリウスさまですね。私はリリーと言います」

愛想笑いを浮かべながら、念のため偽名を名乗る。本名を知られて魔術に使わ

れたら厄介だ。

私の内心では、他にも懸念が渦巻いていた。

（薬に詳しいってことは、毒にも詳しい可能性が高いわ……血じゃダメそうね）

服の下に隠して携帯している、自分の血液を入れた小瓶に触れる。毒に弱い種族や、スライムやゴブリンといった低級の魔物には効き目抜群なのだが、この男——ユリウスにはきっと効かないだろう。

血が効かないということは、次の作戦。

色仕掛けをして性行為に持ち込み、ジワジワとあらゆる体液で弱らせるしかない。

何から仕掛けようかと思案しながら歩いていると、やがてユリウスは一つの部屋の前で立ち止まった。

扉を開けると、中には大きなベッドと引き出しつきのローテーブルだけが置か

れていた。窓越しに月の光がうつすらと部屋を照らしている。

「ここが私の寝室です。ベッドは一つしかないの、あなたが使うといい」

「ええっ!? そんな、申し訳ないです。私がベッドを使ったら、ユリウスさまはどこで眠るのですか」

「魔族は一晩くらい眠らなくても平気ですから」

まさかベッドを譲られるとは思っておらず、本心から驚いてしまった。この男が何を思って私を家に入れたのか、予想がつかない。

しかしこれはチャンスだ。何を企まれていたとしても、先手を打ってしまえばこっちのもの。

「で、でも、悪いです。それならせめて、一緒にベッドで……!」

「それは……いろいろとまずいでしょう」

「まずくないです。私、寝込みを襲ったりしませんし!」

必死にそう主張する私は、ユリウスの目にはたいそういじらしく映っていることだろう。そういう演技には慣れている。

ユリウスは困ったように視線を彷徨わせた。

「……心配するのが逆ですよ。私に襲われることを心配しなさい」

呆れ声でそう言われて、私は頬を赤らめる。

「そっ……それは、泊めていただく恩返しになるなら私は――」

「……………」

ユリウスが小さく息を呑む。もうほとんど食いつきかけているようだ。最後のひと押し、私はそばにあるユリウスの手をとった。

「だってわたし……ユリウスさまの優しさに、心から感謝しているのです……っ！」

心音を聞かせるように、自分の胸にユリウスの手を押し当てる。ユリウスは目を見開き、それから低い声で呟いた。

「……本当にいいのですか？」

「はい……♡」

釣れた。ユリウスの目の色が明らかに変わる。そのタイミングを見逃さず、私は背伸びしてユリウスの襟元を引いた。キスをねだられていることに気づいたユリウスは腰を曲げる。

「んっ……む、ふう」

唇を重ね、舌でユリウスの口元をなぞる。薄く開いた彼の厚い唇の間に舌をねじ込み、唾液を送り込んだ。

（人間の女だからって、甘く見られてる……その隙に倒す……！）

ちう、ちう♡と懸命に舌に吸いつくと、ユリウスの舌も呼応するように絡みついてくる。

私たちは服を脱がせ合いながら、ベッドになだれ込んだ。

「ユリウス、さま……」

体液の毒を浴びせるには、素肌を密着させるのが最も効果的だ。私は下着姿になって、体をすりすりとユリウスの方に寄せる。厚い胸筋に甘えるふりをして汗を移すのだ。

「……触れても？」

「どうぞ、好きなようにしてください……♡」

キスの合間に、ユリウスの手がブラジャーのホックを外す。締めつけが外れて、たゆん♡と露わになった胸にユリウスの両手が迫ってきた。

揉むように触れたと思ったら、指の腹ですりすり♡と突起を擦られる。その間にもキスは続いて、私もユリウスもだんだん息が荒くなってきていた。

「んっ……ふうっ……」

（なかなか効かない……やっぱり毒に強いよね。もしかしたら、このまま最後まで……）

否が応でも体は反応してしまう。いつの間にか乳首はびん♡と立って、触れられるのを待つように赤く熟れていた。ユリウスの硬い指がそこをこりゅっ♡と抓

る。

「ひゃっ……♡それ、やだ……っ」

思わず甘い声が出てしまった。私は体をよじって、ユリウスの手から一瞬逃れる。

汗じゃ効果が弱い。じつくりと前戯をされたってかかる時間が増えていく一方だ。

「した、触ってください……♡」

すり♡とスカート越しに、ユリウスの足にお股を擦りつける。はしたないその仕草に釣られて、ユリウスの手がスカートを下ろした。

「あなたは……どうしてそう誘惑が上手いのです？」

「知らなっ……あ♡だめ♡」

パンツ越しにワレメの線をつー……♡となぞられる。予想していたからさっきよりは声を抑えられたが、本能的に体が強張った。しかしユリウスはそんな私の反応に気をよくして、体を起こして頭の位置を変えた。

「ゆ、ユリウスさま？ 何を……」

するり、とパンツを下ろされる。ユリウスは私の膝の間に手を差し入れ、股をぐっと開かせた。そしてそこに顔を潜り込ませる。

「ま、待って！ そんな、汚い……！」

アソコを舐めようとしているのだと分かり、私は反射的にそう叫ぶ。演技が崩れて素に戻ってしまっていることにすぐ気がついて、冷や汗をかいた。

(危ない……よく考えたら、自分から飲んでくれるなんてまたとないチャンスだわ。死ぬほど恥ずかしいけど……)

抵抗しようと伸ばした手で、私はわざとユリウスの頭を弱々しく押した。

「ダメでしたか？ 嫌ならやめておきますが……」

「っ……いじわる。聞かないでください……!」

「ふふ」

笑ったときに漏れた息が、濡れ始めているおまんこにかかる。くすぐったい感触に体を固まらせていると、ぬるり♡とした感触がクリトリスに触れた。

ちろ♡ちろ♡と、さっきまで舌を絡めあっていたのと同じように、ユリウスの舌がクリトリスに絡みついて刺激する。

(なにこれっ……さすがにびりびりくる……っ)

位置的に表情が見えないのをいいことに、私は顔をしかめる。舐められるのは初めてで、舌の濡れた感触が気持ち悪いはずなのに感じてしまう。片手を意味もなくユリウスの頭に添え、もう片方の手でシーツを握りしめて、私はとにかく違和感に耐える。

ユリウスはクリをじゅる♡と吸い上げたかと思えば、ぺろ♡ぺろ♡とおまんこの入り口を舌でなぞった。

「んあっ♡だめ♡」

何往復も刺激を繰り返す舌の動きに、私は本音を言うなら今すぐ逃げ出したいなっていた。腰は快感から逃げるためにぴく♡ぴく♡と後ろに動いているが、ユリウスにがつしりとホールドされているので意味はない。ただ無様に震えているだけだ。

（これむり、気持ち悪いのに……！早く終わってえ！♡）

私の思いに反して、ユリウスの舌はさらに深くまで入ってくる。おまんこの入り口からナカへ、長い舌がつぷぷ……♡と分け入ってきた。すっかり濡れた私のナカを、熱い舌がぬちぬち♡とかき回す。

「あんっ♡なに、これっ♡」

ぞわぞわ♡と体の奥から何かが這い上がってくるのがわかった。私はユリウスの頭にあてた手に力を込めるが、彼の屈強な体はびくともしない。それどころか、ユリウスは私の腰を掴んでいた手を片方離して、クリトリスに指を当てた。

私の脳裏に、彼の長い爪が思い浮かぶ。

（あ、あんなのでそこ触られたらっ……）

「やっ、あぁっ!?!♡いっ♡♡♡」

がりっ♡とクリの皮の中を爪で引っ掻かれた瞬間、私の頭は真っ白になった。腰を反らしてぎゅうっ♡とユリウスの顔に押しつけ、びくびくと体を震わせる。シーツを握る手の指先からは血の気が引いていた。

「あ……っ♡はぁ、はぁ……♡♡」

余韻に震えていると、ユリウスの頭がやっと私のお股から離れていく。私は涙目になりながら、ユリウスを見上げた。

（これだけアソコの汁を舐めたら、ユリウスだってただじゃ済まないは、ず……え）

そろそろ毒が回りはじめる頃かと思ったのに。

ユリウスは苦しむどころか顔色ひとつ変えずに、目を細めて笑っている。私を出迎えたときと同じ、本心の読めない笑顔だ。

(まさか……!)

頭が冷えていく。顔が青ざめるのが自分でもわかった。意味もなくベッドの端に向かって後退りを始めた私を見て、ユリウスは揶揄うような声音で語りかける。

「どうしました、リリーさん。もしかして、やっと気がつきました?」

「ちが、う、知らない……!」

懸命に首を振るが、ユリウスは意にも介さぬ様子でズボンを下ろしはじめた。ぼろん♡と姿を見せたユリウスのモノは凶悪的な大きさをしている。

ずるずると後ろに下がって見たが、私の背中中は空しく壁に突き当たる。慌てて

ベッドから降りようとするが、足を両手で掴まれ引きずられた。最初と同じ位置まで戻され、ユリウスの欲望が私のおまんこの入り口をぐり♡ぐり♡と擦る。

「知らないなら言葉にしてあげましょうか？ 残念ながら、私に毒は効きません」
「……っ!!」

声にならない悲鳴をあげる。どちゅんっ♡とユリウスのおちんぽが私のナカを引き裂くように貫いた。

目を見開き、口をはくはくと動かしてなんとか呼吸をする私の様子を、ユリウスはくつくつと嘲笑う。

「薬の研究をしていると言ったでしょう。あなたを一目見たときから、毒の匂いに気がついていましたよ」

「ならっ……っんぐ、あっ！なん、で！」

気づいていたならどうして私を受け入れたのか。質問に答える代わりに、ユリウスは手をベッドのそばに置かれたローテーブルの方に伸ばす。

——パンッ♡パンッ♡ぬちゅっ♡ぐちゅ♡

片手間に腰を動かしながら、がさごそと彼は引き出しを漁り、何かを取り出した。

「これを探しにきたのでしょうか？ 健気なことです」

「それ……！」

窓から差し込む月の光に反射して、それはユリウスの手の中できらめいた。

指輪だ、とすぐにわかった。

私が商人に頼まれて探しにきた、祝福が込められているという指輪だ。

「欲しいですか？」

「……っそれを、取り返しに、ぐっ……。きた、の……!!」

体を揺さぶられながら、指輪の方へ懸命に手を伸ばす。ユリウスはてっきり私の手を避けるかと思ったが、予想に反して彼はすんなりと指輪を渡した。

(あれ、今、掴んだと思ったのに……?)

ころん、と手のひらに転がってきた指輪を掴んだつもりだった。しかし握った手の中に指輪の感触はなく、代わりに指輪は私の小指にすっぽりと嵌^はまっていた。その瞬間、私の体に異変が起こる。

「っ!? あっ♡なにっ、なにこれえ!?!♡♡♡」

ばちばちばちっ♡と視界に星が飛ぶ。ユリウスのおちんぼを咥えこんでいるナカが、突然何倍にも何十倍にも敏感になったのだ。ごちゅ♡どちゅ♡と一突き

されるたびに、今まで感じたことのない快感が襲い、お腹の奥から頭に向かって電流が走る。

「まっで、とまってえ!!♡♡これ、おかしいっ♡」

「淫魔の指輪です。気持ちいいでしょう?」

「なん、でえっ……!!♡おっ♡♡」

びくん♡びくんっ♡と何度も腰が跳ねる。そのせいでユリウスのおちんぽがさらに奥にめり込み、私は汚い声をあげた。

(またイってる♡訳わかんないっ♡♡目ちかちかする♡)

「はは、名器ですね。吸い付いてくる。こうやって何人もの魔族をおまんこで殺してきたんですか?」

「ふっ……ううっ♡こんなの知らないっ……♡♡♡」

「知らない？でもナカはうねって気持ちよさそうですよ？」

ユリウスは手を私のお腹に沿わせてっ♡と動かす。どこまでおちんぽが入っているかいやでも意識してしまい、私は身をよじった。

（なんでおなか触られただけで、びりびりきちゃうの!?!♡このままじゃ、私おかしくなるっ……♡）

どうにかやめさせたいのに、毒が効かないとわかった今、私にできることはなにもない。

シーツを握って耐えようにも、手は震えて力が入らなかった。

おちんぽをゆっくりと動かしながら、すり♡すり♡とユリウスの手が私の身体中を撫で回していく。ときどき長くて鋭い爪が皮膚に食い込み、ぴりぴり♡と甘い痛みを与えた。

私は唇を噛んで、ふるふると震える。

「んーっ♡ふっ、グーっ♡」

「我慢しないでいいのに♡」

ユリウスは猫撫で声で言いながら、がりっ♡と長い爪で胸の突起を引っかいた。痛みとともに熱いびりびりした感覚がのぼってきて、腰がかくんっ♡と跳ねる。

「っっ♡♡もっ♡むりっ♡♡こわれちゃう♡♡」

「こら、暴れてはいけませんよ」

「だってえ……！♡」

（この指輪が悪いのに、外れてくれないっ♡今奥突かれたら、やばいっ……♡♡）

ユリウスのおちんぼがぬちぬち……♡と浅いところを行き来する。ナカのひだ

をカリでえぐられる刺激がもどかしい。ユリウスは右手で私の乳首をすり♡すりとこすりながら、左手で私の腰をがっしりと押さえた。

「普通の魔物ならもう死んでいる頃でしょうかね？ 毒が効かない魔族なんて初めてですか？」

「あっ♡♡初めて、だからっ♡♡手加減……っ♡♡」

「先に私を毒殺しようとしたのはあなたでしょう」

一旦浅いところまで引き抜いたおちんぼを、ばちゅんっ♡♡と奥まで叩きつけられる。私は首を反らしてがくがく♡と体を震わせる。

「おあっ!?!♡♡やめっ、でえっ♡♡」

一度では止まらず、ユリウスは何度も同じ動きを繰り返した。

ぬち……♡ばちゅん♡ぬち♡どちゅん♡と続くねちっこいピストンのた

びに、私の視界はちかちか♡と明滅する。

（むり、しぬ……♡ナカえぐられて、掻き回されてっ……♡♡胸もずーっとびりびり続いてる♡全部気持ちいい♡♡♡）

「では種付けされたこともないでしょう。初めて、教えてあげますよ♡」

「ダメっ!!♡おっ♡♡中はやだっ♡」

「やだって声じゃありませんよ？ザーメン飲みたいって下の口も言ってるじゃないですか」

「いっでないっ……♡♡♡」

どちゅ♡ごりゅっ♡と最奥にユリウスのおちんぽが何度も打ち付けられる。

子宮の入り口に亀頭の先っぽがぎゅうっ♡と押し付けられた。乳首をこりこりっ♡と指で潰されて、逃げたいのに腰はゆらゆら浮いてしまう。

「やだっ♡♡魔族の赤ちゃんっ♡♡やだあぁっ！♡♡」

爪先をベッドに突き立てて体を強張らせる。今更ユリウスのぶっといおちんぽを追いつきそうとナカに力を込めてみたが逆効果だ。ナカでびきびきっ♡♡とユリウスの血管が脈打つ感覚がわかった。

腰を強く押さえられ、ぐりぐりっ♡♡と腰を押し付けられる。
抵抗虚しく、ナカでビュルルっ♡♡と熱が迸る。

「あっ♡♡やだっ♡♡やなのになっ♡♡」

（本気イキしてる♡♡ユリウスの言ったとおり、ザーメンごくごくっ♡♡って飲んでる♡♡）

誰も触れられないような体の奥に熱い精子をぶっかけられる感触で、私はまた絶頂する。体をのけぞらせ、目を固く閉じてびく♡♡びく♡♡と震えた。

きゅんきゅん♡とひくつくナカを楽しむように、ユリウスは腰をゆらゆらと揺らす。

「気持ちよかったですか？ふふ、かわいらしい。ここがピクピク♡ってしてますよ」

「あう……♡こんなの、はじめ、て……♡♡」

おへそのあたりを指ですりすり♡ぐっ♡と押され、掠れた声が漏れた。もう抵抗する力も残っていない。

ユリウスがおちんぽをずるっ……♡と引き抜くと、おまんこから溢れた精子がお尻の方に伝って垂れた。その感触にすらぞわぞわ♡と甘い感覚が湧いてくる。

（もう、むり……♡このまま……抵抗、できない——）

何度もいった反動と責め手が止んだ安心感で、急に体に力が入らなくなる。指

の一本ももう動かしたくない。

余韻をなぞるようなユリウスの手つきにされるがままになりながら、私は意識を手放した。